

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ずっと昔から、おじさんの養蜂場ようほうじょうへ遊びに行くのがほくの夢だった。中学生になったら、一人でおいでと、おじさんはいつもさそってくれた。

いくらさそわれたからといって、雅也まさや一人で旅行なんて無謀むぼうだと、しばらくのあいだ、父さんは反対していた。

「発達障害」という言葉が、あの人の頭の中から、はなれな
いのかな。

母さんは、ぼくをかばってくれる代わりに、障害を認めない。だから旅行には行かせてくれたけど、それがいいことなのかどうか、ぼくにはわからない。

ぼくにとって、それもやっぱり息苦しいことに変わりはない。

父さんがいつも行き着くところは、「どうして雅也は、こんなふうに育ってしまったんだ」という、だれも答えやうのない場所だ。

その言葉を聞くたびに、ぼくは底なし沼ぬまにズンズンしずんでいく。

授業中は授業に集中しましょう。

相手の気持ちを考えて話しましょう。

ぼくはそのどちらも苦手だ。

* みつばちマーヤのように、ぼくにも羽があつて、広い世界に飛び立てたらしいのに。

「――北の太陽という家だけだ」

おじさんの声が、音量を増して耳にせまってきた。

「えっ？ 太陽って、なにが？」

「また人の話を、聞いてなかったな」

「へへっ」

笑ってごまかしても、おじさんはいやな顔ひとつしな
い。

「もう一度言うから。今度は耳の穴かっぼじって聞くん
ぞ」

「うん」

「この前電話では、おじさんたちといっしょに、養蜂場に
寝泊まりねとしてもらうって言ってたけど、予定が変わった」

「どういうこと？」

「大学生が一人、泊まりこみで手伝いに来てくれることになつて、雅也の寝るスペースがなくなった」

「ぼくの寝る場所がないの？」

「そうなんだ。それで近くに、北の太陽って家があるから、そこに寝泊まりしてもらおうと思ってる」

「そんな話、聞いてない」

「だから、いま話してる」

「じゃあ、みつばちの世話とか、できないってこと？」

「そんなことないさ。ぜひ手伝ってもらわなきゃ」

窓の外を見ると、広い道路わきに、桜の木が緑の葉をゆらし、ずらつと並んでいた。真っ赤なサルビアも見えた。

少しずつ、山が近づいてきた。

考えて、考えて、ぼくはいい方法を思いついた。

「そうだよ。その大学生の人を、北の太陽ってここに」

「それはむりだ」

「どうして？」

「だって、大学生のお兄さんにはしっかり仕事をしてもらわなきゃいけない」

「仕事ならほくだって」

「毎朝、三時起きだぞ」

「三時……」

「ただの手伝いなら、きょうは眠いからむりですってすませられるけど、仕事となればべつだ。おじさんたちは、花

とみつばちに合わせて生きているんだからな。言ってみれば、自然に命をあずけている」

おじさんの表情がきびしくて——たぶんそれは、ぼくに

対してじゃなくて仕事に対してのきびしさだと思うけど

——それ以上は、^Aどうしても強気になれなかった。

「北の太陽って、どんな場所なの？」

決心がつくと、そちらが気になった。

「旅館？ 民宿？」

「普通の家さ。ちよつと子どもが多いかな」

「多いつて？」

「いま五人かな」

「五人も」

「そうぞうしいかもしれないが、雅也が前に、兄弟がほし

いって言ってたから、ちよつどいいだろうと思つてな」

「そんなの、兄弟とは言わないよ。おじさんだって、ぼく

が集団の中でうまくやっついていけないこと、知ってるだろ。

学校にいたって、なぜだかみんな、ぼくの周りからいなくなる。仲良くしたいのに、おこらせてしまう」

「わかつてる。しかし、そこは学校じゃないし」

「ぼく、自信ないよ。いまのクラスだって友だちは一人も

できないし。いまだけじゃない。幼稚園のときだって、小学校のときだって、みんなぼくから逃げていくんだよ。へんなやつとか、危ないやつとか言って」

「いすを投げたりしたからだろ」

「あいつは、ぼくのくつをかくした」

「はははっ。そうだった、そいつが悪い」

おじさんが目じりのしわを見せつけるように、ニッコリ笑った。

「そうだ。部屋は一人部屋が空いてるって、志保子さんが言ってた」

「志保子さんって、だれ？」

「谷村志保子さん。北の太陽を運営してる人」

「運営？」

「X じゃないの？」

「X だと思いか思わないかは、いっしょに暮らしてから、自分で決めればいい」

「ほかに、選択肢はないの？」

B ぼくは、みつばちマーヤに笑われそうなくらい、弱気になっていた。

「ない。どちらにしても、もう到着する。それから考えても、いいんじゃないかな」

車が枝道に入ると、正面に白い家が見えた。洋館のようで、その奥へと続く森の緑によく映えていた。

柵も塀もない開放的な敷地に、おじさんは車をとめた。

(中略)

「北の太陽」には、海鳴(中1、雅也と同じ)、杏奈(小5)、ゆず(小3)、瑛介(小1)、麻央(5歳)の五人の子どもがいた。

志保子さんが、ダイニングにみんなを集めた。

*さかえ
栄さんは、夕飯の準備をするため、買い物に出かけている。

開けた窓から風が入る。エアコンはあるけど、まだ動いたところは見ていない。

みんなが、夕飯のときと同じ場所にすわる。

志保子さんがいつものものにこやかな表情で、みんなの顔をゆっくりとながめた。

瑛介は、テーブルの下で、さつきから足踏みしている。帰りの車の中でせっかく海鳴と外で遊ぶ約束をしたのに、

と不満をもらす。

「さてみなさん。きょうの午前中、杏奈、ゆず、麻央ちゃんの三人は、ピアノを教えてもらいに行きました。そこで先生に、秋の発表会に出てみませんか、さそっていただきます。それだけ、一生懸命に、練習をしているということです」

「わあー。よかったね」

声を上げたのは、瑛介だった。なのに女の子たちは瑛介の声に、むしろうつむいてしまった。

いやな予感がする。

志保子さんは「ところが」と、ひと呼吸おく。

「困ったことに、その発表会に、ドレスを着たいと、杏奈とゆずが言い出しました」

「だって、みんなドレスを着て演奏するって言った」

「みんな？ 本当ですか、杏奈？」

「そうよ。みんな、ドレスを着るって。ね、ゆず」

「う、うん」

「先生も、なるべくドレスがいいって」

語気を強めて、杏奈が主張するということは、志保子さんから、反対されたってことか。

「それはへんですね。わたしが先生に電話をして聞いたら、制服やふだん着で参加する子もいると、おっしゃっていました」

「ズルいよ。電話するとか！」

杏奈がどなる。

ゆずはチラッと、志保子さんを横目でにらむ。

「でも、制服で出るのは、男子だし。ふだん着の子は、ふだんから一生懸命に練習してない」

杏奈は折れる気はないみたいだ。

ぼくたち男子三人は、なんとなく、ぼかんと聞いていた。どうしてもめているのか、かんじんなところがわからない。

「志保子さん。ドレスだと、どうしてもだめなんですか？」

これくらいなら、口をはさんでもかまわないだろうと、ぼくは聞いた。

「いくらかかるのかは、わかりませんが、そういった予算はここにはないということですよ」

「よさんって、なに？」

瑛介がきょとんとした目を海鳴に向けた。

「お金だよ。瑛介がほしいおもちゃがあっても、お金がな

きゃ買えないだろ」

「そういうことです」

志保子さんが、うなずきながら、女の子たちを見る。

「買うんじゃない、借りるの」

「どちらにしても、そういうわがままを言われると困ります」

「こんなのが、わがままですか？」

「ここではそうです」

「じゃあ、もう発表会に出るのあきらめる」

杏奈がふてくされる。

ちよつとかわいそうに思えた。発表会にドレスを着るなんて、普通にやってる家庭はたくさんあるのに。やっぱりここは、普通の家とは呼べない。

「いいですか。発表会に出るなどは言ってません。ドレスも用意していただけないか、福祉協議会や、ボランティアアセンターに問い合わせてみます」

「そんなのいや。ちゃんとしたのがいい」

「杏奈。ちゃんとしたのとは、どういう意味ですか」

「だから、お店に並んでる中から自分で選びたい。ピアノ教室に、パンフレットもあったよ。段ボールに入った服は

もういや」

「ちゃんと新しい服も買っているでしょ」

「でも、みんなそんなふうには思っていない。ずっとどこかの倉庫の奥に、何年も眠ってたやつで、安い洗剤とほこりのおいしけしないって、そう思ってる」

「なんですか。多くの善意を、踏みにするような言い方をして」

「わたしが言ってるんじゃない！」

志保子さんにたしなめられたとたん、杏奈が鋭利な刃物のような目つきになった。

「学校で言われているよ。くんくんくん、安い洗剤のにおいがするって。いままで志保子さんや栄さんに悪いと思ってる、だまっていたけど」

よほどがまんしていたんだろう。杏奈のひとみから、なみだ涙があふれた。

志保子さんもだまってしまった。

重い空気が立ちこめる。

「ねえ、杏奈、知ってる？」

海鳴は、ここは年長の自分が、どうにかしなきゃと思っただのだから、やさしい声で話しかけた。

「みつばちマーヤの冒険ぼうけんの中に、こんながある。——運命がひきはなしたものを、またいっしょにはならぬよ、という、ばらこがねのクルトのセリフ。

「どういふことだと思ふ？　ぼくはこう思う。ぼくたちは、ぜいたくとはけつしていっしょになれない運命なんだ。だからぜいたくを知つてしまうと、いつか身をほろぼすことになる。もちろん将来、自分の力でぜいたくできる境遇きようぐうになれたら、それはいいと思ふけど」

「ドレスを着るつて、ぜいたくなの？」
目を真つ赤にして杏奈はうったえる。

「いまのぼくたちにはね」

海鳴は、きぜんと答える。ぼくは胸が苦しくなつた。

海鳴がぼくを見て言った。

「雅也はどう思う？」

「えつ、ぼくの意見？」

「だつて、北の太陽の一員だもん」

海鳴は平然と言うけど、ぼくには答える準備もなければ、経験もなかつた。

杏奈やゆずが、ドレスを着たい気持ちは理解できる。でもお金の問題となると、話はちがってくる。

海鳴は志保子さんにも気をつかっているのだろう。そう考えると、ここで自分の考えを主張するなんて、こっけいな気がする。

「もしかして、自分の気持ちはないの？」

「いや、そんなことないけど」

「自分の意見に、自信がないとか？」

「それは……あるかも」

ぼくの意見は、よくクラスの和を乱した。

「話しても、だれかを不快にしてしまうかも。そう考えると、話すことに意味があるのかなつて、そう思う」

「それでも、わかりあうためには、言葉にするしかないと思う。ここではみんなが自由に発言できる。みんな同じ太陽の下にいる。だから、もしなにか思っているなら、話して」

ぼくはとてもうれしかった。いままで自分の言葉を、みんなにいいねにあつかつてくれたのは、両親とおじさんだけだ。

「それなら言わせてもらうけど、ドレスは着せてあげたい。それはあたりまえの感情だし、かなえてあげるの、大人の責任だと思う。たとえドレスが似合わないとして

も」

ふっと、海鳴が吹き出した。

「えっ、なにかおかしい？」

「あ、いや。それでいいよ」

応援おうえんしたつもりが、杏奈もゆずも、ぼくをいやそうな目で見る。

「ねえ、志保子さん。お金なら借りればいいじゃないですか」

ぼくなり考えて言った。

「そういうくせを、いまからつけてほしくありません」

志保さんはがんとして、意志を曲げる気はないみたいだ。

「瑛介はどう思う？」

海鳴が聞くと、

「ぼくもドレス、きてみたい」

と、的外れなことを言って笑わせた。

みんなの気持ちがあつとほぐれると、それを機に、

「まだ三か月前ですから、ゆっくり考えましょう」

志保子さんが、長期戦をほのめかした。杏奈たちが妥協きようしたり、ましてや忘れるなんてことはないだろうけど。

(村上しいこ『みつばちと少年』による)

【注】

*みつばちマーヤ——児童文学作品『みつばちマーヤの冒

険』の主人公。雅也と北の太陽の子

どもたちの愛読書。

*栄さん——志保子さんの娘。「北の太陽」を手伝って

る。

問一 — 線部 A「それ以上は、どうしても強気になれなかった」とあるが、それはなぜか。理由を説明しなさい。

問二 空欄

X

 にあてはまることばを、文中から四字で書き抜いて答えなさい。

問三 — 線部 B「ぼくは、みつばちマーヤに笑われそうなくらい、弱気になっていた」とあるが、雅也が弱気になるのは、自分のことをどのように思っているからか。最もよくあらわしたことを、文中から十五字で書き抜いて答えなさい。

問四 — 線部 C「でも、制服で出るのは、男子だし。ふだん着の子は、ふだんから一生懸命に練習してない」とあるが、この発言で杏奈が伝えたいことは何か。「権利」ということばを使って説明しなさい。

問五 — 線部 D「志保子さんもだまってしまった」とあるが、それはなぜか。理由を説明しなさい。

問六 ——線部E「きせんと」とあるが、このことばの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 意志が強く感じられる様子でしつかりと
- イ どうしても自分の意見を押し通すように
- ウ 不満を抱いたままの様子でふてくされて
- エ 周りの人の様子をうかがいながら慎重しんちょうに

問七 ——線部F「ぼくは胸が苦しくなった」とあるが、それはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 杏奈や海鳴が大人である志保子さんも交えて自分の意見をしっかりと知っているのを見て、自分の意見もうまく言えるか不安に思ったから。
- イ 子どもたちではどうすることもできない経済的な状況じょうきょうによってドレスをあきらめるしかないという意見に、やりきれない気持ちになったから。
- ウ ぜいたくとはいっしょになれないという運命を受け入れるしかない北の太陽の一員に、今は自分が入っていることにいらだちをおぼえたから。
- エ 目を真っ赤にしてドレスを着たいと言う杏奈がとてもわがままに思え、海鳴の意見をもっともだと思ひ、志保子さんがかわいそうになったから。

問八 — 線部 G「それなら言わせてもらおうけど」とあるが、それまで自分の意見を言うことに消極的だった雅也が、意見を言えるようになったのはなぜか。雅也の気持ちの変化を中心に、七十五字以内で説明しなさい。